

グラントワ Grand Toit

企画展

石見の戦国武将

—戦乱と交易の中世—

2017年 9月30日〔土〕－11月13日〔月〕
島根県立石見美術館（島根県芸術文化センター「グラントワ」内）

展覧会の概要

武士が勢力を伸ばし、鎌倉・室町2つの幕府が列島を支配した中世（平安時代末～安土桃山時代）は大小の戦乱が起こった時代でした。石見国でも、益田氏・吉見氏・周布氏など複数の武将が並び立ち、しばしば権益をめぐる争いが生じていました。一方でこれらの武将たちは、京都の足利将軍や隣国の大名大内氏・毛利氏とわたりあう中で、手を結び相互に協力することもありました。

彼らの活躍の背景には、日本海を通じた交易・交流による石見国と海外（朝鮮、中国、東南アジアなど）とのつながりがありました。領内の産物をもとに朝鮮や蝦夷地（北海道）の貴重な産物を入手していた益田氏のように、武将達は武略だけでなく交易にも深く関わっていたのです。

本展覧会では、武将たちの奮闘の様子を物語る古文書や、彼らの高い美意識をうかがわせる美術工芸品など国宝1点、重要文化財4点を含む約100点により、石見国内で最も有力であった益田氏を中心に、石見の戦国武将の歴史と文化を紹介します。本展を通じて、武将たちのふるさと石見地域と、東アジア規模に展開した交流に思いを馳せていただければ幸いです。

会期中展示替えがあります。※がついている作品は半期のみ展示となります。各作品の展示期間については、お問い合わせください。

みどころ①

全国有数の質と量を誇る「益田家文書」をはじめとした中世古文書により、戦乱期の武将たちがどう戦い、どう生き抜いたか、その具体的な姿に迫ります。

みどころ②

画聖雪舟の絵画、仏像、刀剣などの美術工芸品により、中世の石見に息づいていた豊かな文化を紹介します。

みどころ③

大航海時代を迎え、国を越えて人々が行き来したグローバルな時代に、石見国が東アジアの国々と深く結びついていたことを、最新の研究成果から明らかにします。

【主催】 島根県立石見美術館、島根県古代文化センター、しまね文化振興財団、益田市、益田市教育委員会、山陰中央新報社、山陰中央テレビ
【協力】 東京大学史料編纂所
【後援】 芸術文化とふれあう協議会
【開館時間】 10:00～18:30（入館は18:00まで）【休館日】 毎週火曜日
【観覧料】 企画展 一般1,000（800）円、大学生600（450）円、小中高生300（250）円
企画展・コレクション展セット 一般1,150（920）円、大学生700（530）円、小中高生300（250）円
※（ ）内は、20名以上の団体料金
【問合せ先】 〒698-0022 島根県益田市有明町5-15 島根県芸術文化センター「グラントワ」内 島根県立石見美術館
TEL 0856-31-1860/FAX 0856-31-1884 http://www.grandtoit.jp
担当：〈広報〉志田尾（しだお）、坂根（さかね）、村川（むらかわ）、〈学芸〉角野（すみの）、川西（かわにし）



狩野松栄《益田元祥像》
桃山時代
島根県立石見美術館蔵

重要文化財

第1章 益田氏の発展と「益田家文書」の世界

石見国有数の戦国武将であった益田氏の祖先は、一説では藤原氏だといえます。平安時代末に石見国司であった藤原国兼が、上府御神本（現在の浜田市）に住みつき名字を「御神本」に改め、その後、第4代の兼高が益田に移住して「益田」を名字としました。兼高の後、益田氏は安土桃山時代まで益田地域を治め、石見国内で最も有力な武将として名を馳せました。本章では、益田氏の歴史を物語る「益田家文書」を紐解きながら、第15代当主の益田兼堯や第20代当主の益田元祥の肖像画をはじめ、雪舟の絵画などの益田氏に関わる美術工芸品を通して、益田氏の豊かな歴史と文化を紹介します。



益田家第11代当主の益田兼見が檀那（資金援助者）となり制作

《釈迦如来坐像》
南北朝時代
応安4（1371）年
医光寺（益田市）蔵



益田市指定文化財
伝雪舟《花鳥図》※
室町時代
益田市立雪舟の郷記念館蔵



雪舟
《益田兼堯像》※
室町時代
益田市立雪舟の郷記念館蔵

重要文化財

第2章 御神本一族の興亡と地域

御神本氏の子孫には益田氏の他にも、浜田地域を治めた三隅氏、周布氏、福屋氏などの武将がおり、彼らは互いに協力と争いを繰り返しました。さらに御神本氏の子孫ではありませんが、吉見氏が津和野地域を治めており、中世の石見国は複数の武将が並び立つ「群雄割拠」ともいうべき状況でした。また、石見の武将は足利将軍や大内氏、毛利氏などの石見国外の有力な大名とも時に対立し、時に親密な関係を持ちました。本章では古文書や美術工芸品を通して、御神本一族各氏の地域社会との関わりや中央政権・隣国大名との関係を探ります。



三隅信兼が檀那となり制作
浜田市指定文化財 《紙本墨書 大般若経》※
室町時代 宝福寺（浜田市）蔵



大内義隆が石見国一宮の物部神社に寄進
《太刀 銘 了戒》 鎌倉時代 物部神社（大田市）蔵

重要文化財



毛利元就の菩提寺洞春寺に伝わる肖像画
《毛利元就像》 作者制作年未詳
洞春寺（山口市）蔵

第3章 中世の東アジアと日本海・石見国

中世の石見国では、豊富な山林資源・鉱物資源を背景に早くから日本海交通が活発になり、各地に湊町が栄えました。京都と中国・朝鮮の中間という立地を活かして日本海を行き交う船は、中国・朝鮮・東南アジア産の陶磁器や北海産の昆布など、各地の特産物を石見国へもたらしました。戦国時代には石見銀山で良質な銀を豊富に産出し、「石見」は大航海時代のヨーロッパにも知られたのです。本章では出土品や古文書などから、交易を背景とした石見国の繁栄を紹介します。



益田藤兼・元祥父子が毛利元就をもてなした宴の料理の献立
《益田藤兼・同元祥安芸吉田一献手組注文》※
戦国時代 東京大学史料編纂所蔵



日本海を通して石見を訪れた薩摩の戦国大名の一族、島津家久の旅日記
《中務大輔家久公御上京日記》※
戦国時代 東京大学史料編纂所蔵

国宝



「Hivami」（石見）付近に「Argenti fodinae」（銀鉱山）と記すヨーロッパ製の日本地図
《オルテリウス 日本図 ティセラ型》※
1595年 島根県立古代出雲歴史博物館蔵